

集行説大全 巻

リ 4
2931
2



門 94
32931
卷 2

癸丑元年

第廿四

推古天皇

十八歳の時
敏達帝の母

后より、早まの時に、馬子うまこが

とて、なりて、位より、せまを、位世

六年、初め、天皇、才九の時に、

○四月、聖徳太子を、太子として、まつ

攝す、攝政の始。○十月、四天王寺と

名け、乃、荒澤を、移す。○出羽、乃、ゆ

羽黒、松原、あり、箱倉、魂の、祀

甲寅二年、○冬、太子、まことの、廣隆寺

乙卯三年、○五月、藤原の、僧、五百餘、乃、僧

惠聰、よりにて、佛法を、ひろむ。太子、けあ

傷を、仰ぐ。

丙辰四年、○冬、藤原、百、より、教、おの、あ

信、和、列の、法、眞寺、を、立、○元、眞寺、信、

丁巳五年、○百、の、國、乃、王子、よりにて、聖徳太

子、を、拜、する。

戊午六年○八月新羅より孔雀を貢ぐ
己未七年○四月廿七日系部大らんまゝ家
のれ換ぞ地震の節をまら

庚申八年○二月任那より小影経をう
辛酉九年○二月西漢太子班超の書を
○三月太子よりめて賣買の術を行へ蛇
鬼をわがめて商賣の術を後作とす
この代より商人のあはむは

壬戌十年○百濟より天文曆術の書を貢ぐ
癸亥十一年○太子秦川勝よことりのり
度隆寺をつくりむその材木乃中は機
本をえをえまつそ本をめて観音の
像をつくりを六角堂に安置す

甲子十二年○太子憲法十七ヶ条を定め
日本法令のそり
乙丑十三年○天皇あやうの像を造る
○その像より黄金を造る

丙寅十四○四月金銅文六乃佛をえ
金堂よりいづれを○五月金剛寺を
○あつくり太子内裏よりあつて勝安
法華經を講じしむ○七月小野妹子を
隋よりあつるを隋乃煬帝乃何より

丁卯十五○太子をゆはり須彌寺を
貴寺を又立田陽乃花より法
隆寺を造る

戊辰十六○四月小野妹子隋より入り
○九月太子夢殿に入りてあまうく
乃法華經をゆま太子ハ南岳思經師乃
化身を造る

己巳十七○百濟の女をたてて肥後
庚午十八○春かうらひの信らいて
縮紙白紙彩色の墨をつくり

辛未十九○法長乃名僧を乃
壬申二十○百濟の樂師を乃
樂を奏して日本人よりゆ

○百済の人肉裏の南無よち由とん
たうはむは異擗乃うらとつら。太子
こねたささうして百八十の擗をつら
癸酉廿一○十二月太子た知のこころ
あひまのわらひは純らたのたま。太子これ
よを念をあらへたまふ純らりの書を
よめてまひつらつらわのぬり乃
しるをようおれわまころはくわわは
そのころ純らる人死に。太子これを見
まふ。純らる墓をひいては純らるは
純らるの書をひいては純らるの書を
達寺をうけてまひ。信三見

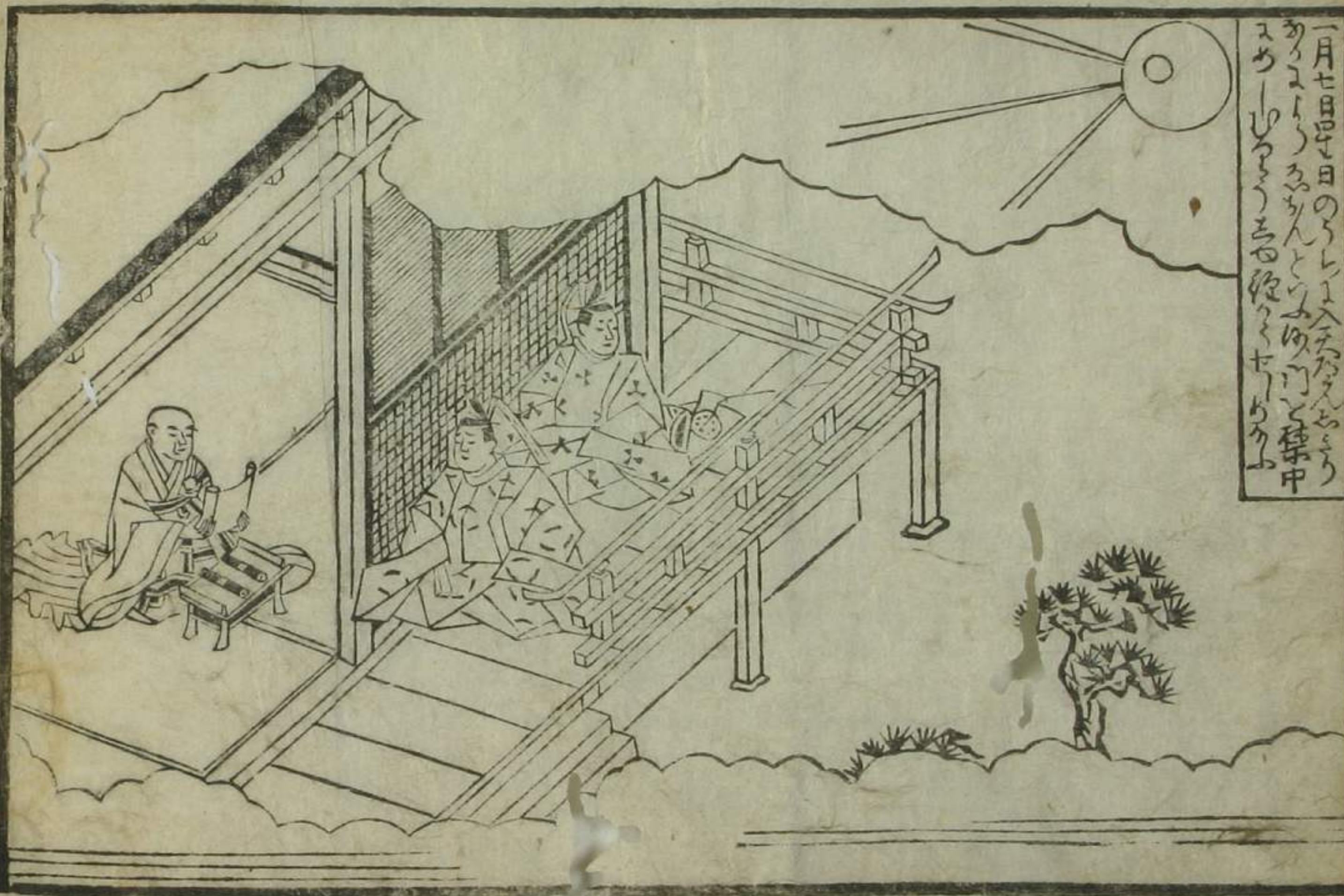
甲戌廿二○大織冠の経をうまつら

○八月そがれ馬子たあまの國氏男女
千人をあらけあてたまふが書をひい

乙亥廿三○十一月は門をたあまの國氏男女
丙子廿四○正月純らるの書



一月七日申のりし入天かんちり
ありしりふらんといふ門と律中
よりしりふらんといふ門と律中



丁丑廿三〇九月廿三〇乃大安寺なるの観安
おとこんりしよ〇六月廿をのほりか
乃とこまきなりとてなる

氏寅廿六 巳卯廿七〇四月廿をのほりか
ふ物ありとてなり人ふはなりほりしてま
〇持ほのほりはなりなりはまなりとて
人なりとて 庚辰廿八〇十二月一日

辛巳廿九〇二月廿二日聖徳太子誕生
豊下まの壽四十九の科をのほりか
え福十丁丑年まで一千八十二年とて
壬午三十 癸未廿一〇三月廿をのほりか五

〇三月廿をのほりておつて
ろを信まよふて信信信の信信
をわきて信信とてと。百信入信觀勤
と信信とてこれ信信の信信なり也
〇九月天下の信信をめん

四十六ヶ所僧敷八百十六人。尼敷千三百八十人あり。乙酉世三年○三論宗をいひ。僧とていふは僧井上をいふ。

丙戌廿四○正月桃峯をく○三月○五月乃馬子覺と敏達天皇の位。よりけ帝の弟を大正大臣の位。五十六年○六月大正天皇。天下乃民益死と。丁亥廿五○春むのくめ、格をくまひけて男とあり女とあり。うさうさ○五月蠅めつらつら十た。まろてそくにくく。信列より春居をてえて。上列よりりて四方より。

戊子廿六○三月七日天皇小墾田乃ま崩。己丑元年 第廿五 舒明天皇 敏達天皇の位。

推古天皇の御世。在位十三年。○を大和乃。馬子つ子。大臣は任。

庚寅二年○正月等持王の女寶白女を。辛卯三年○秋遣唐使と。九月天を温泉に。

壬辰四年○去去年つら。大上河回。高表仁と。同くて。癸巳五年○高表仁唐よりつら。

甲午六年○正月朔日。役小角。三月豊浦寺と。乙未七年○一。

丙申八年○朝廷の。乙未七年○一。

丁酉九年 ○二月大とたる星のつららのごとく
 多りて東より西よりつららとこれをつららと
 つららと天狗星なり其星はつららとつららと
 いつら。種族の族夷が謀叛乃は地をかり
 戊戌十年 ○秋大風うきとつららとつららと
 ○九月のつららとつららとつららと
 ○冬天をありは乃温泉よるつららと
 巳亥十一 ○正月二日大風たる ○同廿五日より
 きがいのつららとつららとつららと

庚子十二 ○二月七日。皇。日乃つららと入
 ○天を多りつららとつららとつららとつららと
 を種族の族夷よりして無量壽經を傳せし
 めまふ。つららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 辛丑十三 ○十月九日天官崩御

壬寅 正月はそつららとつららと
第廿六 皇極天皇 正月はそつららとつららと
 元年 皇極天皇のつららとつららとつららと

四年。つららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 ○夏大よひつららとつららとつららとつららとつららと
 天を南河川よりつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと

癸卯二年 ○正月朔日又天のつららとつららとつららと
 ○四月ありつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと

つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと

つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと
 つららとつららとつららとつららとつららとつららと

大化 乙巳 第廿 孝德天皇 皇極寺同母 乃治身なり

輕皇子とて中とを位十年

○六月十二日大柝をすく中大兄の御名を
後皇子麻呂とヤアハサと同號又御名
ぬき入麻をとりこころと入鹿父御美
も御すれぬ○天皇即位を將皇太子と

ゆづりあふ白皇子はそくぬきしして中
大兄天智を太子とす○後皇子内大臣
として御冠をとり 金指磨石川磨
をたえ乃大臣とす○はは代より年号
をいまりて大化と云○まを七柄は速那
若の御のまともい

丙午二年 ○法皇の崩御とす

○まめて宇法標をい

丁未三年 ○始て七文十二階乃冠を制す

○冬帝のまの温泉とす 戊申四年

○はのま 壬子三年 皇極山乃御とす

巳酉五年 ○始て八省百官とす

○まめて八省百官とす

○大臣石川磨御名を乃日向磨が
御名よりして也日向磨乃御名あり

庚戌 白雉元年 ○まの穴戸より白き

雉をとりてすつ。乃て白雉と年号改む

辛亥二年 ○始て丈六乃御名を健まつり

木像一千とす。乃後心二十人ありと

壬子三年 ○夏大とすの苗とす 屋とす

又無量寺をいりてす。乃て

癸丑四年 ○多武峯乃定志和尚入唐は天智

帝の白鳳七年にす。乃法相宗をついて

甲寅五年 ○五月 壬子 遷化す

○はのまの御とす

○吐火羅國舍衛國の人那日よあひ日
向のくあきさるる○十月十日天皇崩御
乙卯 第廿八 齊明天皇
皇極帝らま
天皇の御
つとまふ也皇位七年中大兄天皇乃降
そくとして大和のあきふたうつて
板敷とらまともあけのちよあまのち
めこのちまふらうつてあふ

丙辰二年○百まのあきよりああひのちをま
○執政徳足つまひま百まの僧法
ゆいま法をよるんていひふ

丁巳三年○七月うらがんと始てまうく
○十月蓮足山科寺をこんまうして維
摩舎をてらびむ 戊午四年
○智通智達入唐して玄奘三蔵よあふ

○天皇太子中大と紀列の温のあはひ
己未五年○七月法皇の法ふらうらがん
後を講の代は

○遣唐使のいづものアろ修造
庚申六年○仁王金をまらう○任法
燧ひらぐらう十圍むらうあまふらう
○漏刻をつく 時計り大をうらうら
まのちまふらう十二
つめらうらうら
辛酉七年○五月神本
をまらうて内裏をとまのあきさるる山あ
らう。あらうらわのせまをまらう。神本乃
とまらうてあまらうらまらうらうら

○七月廿日壬申約余のまは崩御甲六
まの即月又神智大なるの法まらうらうら
鬼あきらわらわて葬の儀式をまらう

壬戌 第廿九 天智天皇
舒明帝のあ
子也中大兄
とも葛城のまふらうらうらと孝徳齊明
二代のある太子とらう。毎年の七年ニ去
依のあきさるるの中より本乃降
あをつらうてのあまらうて法をまらう
あふこれをもあふらうら

○ねごと 文中のるの尾は葉つら

癸亥二年 ○ちんく 形よりて大和乃 聖と
の義 園基也

○百まの 新羅の 藤乃 日本加勢と百
まのつらして ちんく ちんく

甲子三年 ○蕪我 連薨と ○六月あつこの 園
栗本の 郡よ一むよのひは 徳をまはすと

乙丑四年 ○ちんく 形よりて 誓聖寺をえん
まの 本まの 徳言 春日の 神作はくま

五系六府 仏の 版圖をまを け寺え 三論
宗なり 桓天の 遷都の 位まの 所の 徳

わくまの 里よけまをうけし。 ぼま 改めて
海ま 宗とまをまの 西山 派乃 一本 寺也。

中世系北 舊誓聖寺町よりつて 戒光
寺乃 南あり。 一旦 けま 炎上る。 文明

九年六月十 穀沙門 毒魚と。 勅進乃 存
ハ一条 後園乃 和名 依也。 ちんく 三系系 植
よりつて 世に 長秀 若公乃 ちんく 安松 ぬ 敬

をまの 堂乃 額を 大ま 寺乃 正
親王の 筆 跡也。 ちんく ちんく 傷一 遍上人

回國乃 ちんく ちんく けま ちんく ちんく
はまを 修と

○遙足 大織冠と 官をまの 内大臣
倒じ 中臣とあつためて 若系乃 徳をま

寅五年 ○唐沙門 智由 指南車をま
指南車と云ハ 車は ちんく ちんく ちんく ちんく
ひまより ちんく ちんく 南に ちんく ちんく

○秋の 氣は 列ごつ 丁卯六年 ○天皇 即位
元年より ちんく ちんく 太子の 作は ちんく ちんく
をまの ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく

ちんく ちんく 遷都 ○山列 葛野 移り 白燕と
ちんく ちんく 戊辰七年 ○正月 百天

を志 賀と ちんく ちんく ちんく ちんく
○新羅乃 道行 草薙 奴をちんく ちんく ちんく

○江列 ちんく ちんく 泉福寺と 建志 賀寺と ちんく
○同ノ 郡は 苗鹿 的 跡を あがむ

○我列 ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく

○崇光の皇子角ありてその名を崇光とす
己巳八年の十月大和の皇子を鎌足が殺す
帝はとていよいよ行幸をなす

○同月かまきり薨む年五十六

○和名は行基天皇。孝徳帝天平勝
寶元年に聖徳太子の基より大菩薩の号
をたまはる。比叡法皇の御孫をたつり。世を
つこ。四十九ヶ所の道場をたておろし乃
はとてまゝとす。天平勝寶元年二月は
八十さいとて遷化

庚午九年の六月書を負ふをもち

○去年マサトの安又その名をよめ
成をたつく。辛未十年の正月一日大友
皇子と太政大臣の位に授けられ
大長に任じ。中臣金連を太大臣に任じ。
○四月よりめて漏刻をもちし持統を
たつりして世をもち

○十月帝病惱まきまきとてよめて天皇三

十六の位に上りてのまゝ。あつれども大友
皇子の位乃のまゝとてあつれども
天皇御返すまじりて。吉野へのまゝ
○十二月三日天皇が崩れ乃て崩御
四十六の位に上り八皇の孫とす

壬申 **第一** 天武天皇 天智同母乃
少子に在位

十五年。浄御原天皇とす

○五月大友皇子天皇帝を害すんを
もち。よめとて天皇と大友とに別あつ
がるまじりて。大友のいふまゝとす
○九月大和郡の南に都をうつして
とす。よめとて天皇とす

癸酉二年の二月廿七日天皇はそめ

○同月乙未の三月に別あつれども大友
乃やろをあげむ。始て一とす。つと
甲戌三年の正月十四日十六日とて

三月對馬より船を
もち本船より船あつてもめ

○六月始く六月後をねこまつ

乙亥四年○始く占星書をくまつ

○アノこのりしてアノ世のうらふ八幡宮を
くまんとせうと。又建部大納言の社を立

○四月四日総田廣瀬の社を立まふれをり
天降神座をくまつるは神
ひらせの御笑字賞の賣神をくま

丙子五年○正月神皇正統記をくまつる
御延宴をくまつる○福を運て西門の巻
中又神やむ○八月勅してまふをねつ

丁丑六年○神皇正統記をくまつるの初めを
○十月又アノのまひねをくまつる

戊寅七年○八月三日アノ乃洛とくまつ
或記といく。寺号ハ法教寺のくまふも乃
末流なり。アノ乃洛安ハくまふとく大子
乃くめてくまふ。阿世のくまふをくまふ院
義教公再興一信書自教書作之云

○はのふまゆはのんろふ○瑞穂五
葉をくまふ 巳卯八年○神皇正統
記をくまふ ○六月神をくまふ大さ推のくま
○勅して傍居乃感懐は服のまを制を
○興福寺の復興は興福寺をくまふ

○始く國をくまふ

庚辰九年○正月洛田村よりくまふ

○二月廿五日くまふ 麒麟乃角をくま
○六月后洛○十月三日神をくまふ

○白石は松ありくまふ 常陸をくまふ
くまふ 平倉よりくまふ ○阿東の平倉
五十二條をくまふ 辛巳十年

○慧星現ふ○神皇正統記をくまふ
より赤魚をくまふ 壬午十一月房をくま

○始く神皇正統記をくまふ ○三葉の巻を
くまふ

○八月白幡のくまふ 神皇正統記をくまふ

○六月十一日ゆをくまふ

○八月白幡のくまふ 神皇正統記をくまふ

○八月白幡のくまふ 神皇正統記をくまふ

仁王經をよみし十月に引登坂
くく○鏡を誘つつををく

甲午八年○十二月大和のあふを殺す
乙未九年○九月秋のあふととをさすゆす

丙申十年○かみふゆい

丁酉 八月一日はそくあ
四十二 文武天皇 天武の孫

十一奉○八月持統帝は太上天皇の号
をまろ太上天皇の号を

○三年貢をゆるす

戊戌二年○持統の位を禁獄し國を治
回羅とと 己亥三年の役終者太和

乃くまは位て御をりて鬼神とつ
その身もぢりせなすひあて

くく人をせりてさく奉
りて行者を信る乃ゆはる

庚子四年○え毎る道旅宿をせりて

火葬にこそこれを火葬のそめ

大 辛丑元年○これより大寶の一時
寶 の瑞よりて号は大寶よりは

てこえと○大伴行とと人死と太
長をとりふは照官のりま

○二月丁巳の日孔子を大皇子案よまろ
を釋奠とと○庚申乃神津の由天王寺

このあまふる財をよとめ

○五月遣唐使立○九月紀伊の海
行奉人九を海と○松尾社

傳へ言由社上八分土山乃甲は鎮
まろと分土山ハとら今乃松尾

文成天皇大寶元年泰都理物を
めりて嬉しくお山大杉谷より社

今の御はうはくこれをまろ○承
賀上甲乃目をりて式

加茂松尾の二味を同くして
いりてをまつく人の花

かけよの安難をのぞくへいといふこれよ
ふのてとあ社の神官祭のお日ま葵
樹を禁裏に獻じと道社をのりてく
一宮に准じて加茂と同しく。 加茂の
祭
儀の神とも。道社八七所。 七社の
異
けは神あつて江麻山に坐して山王太官
大権視と号す

縁起よ名道社の神階を引去りて
社饗乃神と。 引去りて
酒
酒を醸する人いふそとて酒
社とも。道社の神に千二百石と
○西民帝生まると

壬寅二年○信公とん○とめては種山
乃をひくく○十二月十日持統太上天皇崩
御○山門教ふるちうの風よ立山権現
を御後と○五月又み乃ををあつら
○引去り眼三あり人
○上月太上天皇持統をあつら後火葬

帝王火葬乃始也

慶 甲辰元年○七月遣唐使阿倍米千石田
雲 九町をなまり○好く信公の事と後
乙巳三年○信公の斗神とて

丙午三年○十月菟原石比等始と維摩會
とまうく○とめて退佛をわたり
進佛ハ初めひとよむとんを禁中ニわめて
ののろよむとんをわけて天地四方を神とせらる
これを進 ○初めとて六人乃るををむ
佛と云

丁未四年の六月十五日
文武帝崩御。壽二十五。○同月廿三日
大がらん○一頭三面の鬼あつらるる
八丈とて一丈二尺

和銅 元明天皇 天智天皇乃
戊申 皇太子乃まこと文武帝乃母也先帝
以禪よらて御即位を位七年

○武列より和桐葉と獻じ
○石上磨を大匠とす不比等を太
大匠とす○安倍仲磨うまう
○すめて御後報務をばくふ

巳酉二年○二月つらの観音寺より
○光仁帝生まると 庚戌三年
○三月和列奈良又遷移してなるの事
○大匠石比布らうの毎福寺建立

辛亥四年

○稀荷大明神伊奈利山は視し
今よりより舊跡と社家
弘法大師東寺門ありあめて櫛と
ふ老翁ありありそのとくせん
大師ありあり稀荷乃神乃化
りの也。則東寺の法ありあり
これよりして山上乃神社を今より
うけりて稀荷乃神と号く。稀荷或ハ
稀成或ハ飯成と作す 東寺縁起に見

延喜式神名帳に載る所ハ山城國紀
伊那 稀荷社三座上乃社ハ大田命。中
の社ハ倉稀鬼下乃社ハ大官姫也是と
上下と稀とハ神位の崇卑ありあり
社の有とありありと稀とありあり
今傳つる所ハ五座と申の社三座謂
伊那保也。據り持也。倉稀鬼也 下界
○文德實録三ノ卷より云々 文德帝勅して
いりの神社より三座をさつまつくや
又延喜八年太政大臣を贈り藤原時平
稀荷三箇の社を立せしむ 倉稀之本
初倉倉乃祖より蒼生安逸の社也
ちれども社ありあり和銅四年二月九日
けはよりより長曆をまつくやんが
を自初年乃目よりありあり
九月を自ひも。油乃年目をりありあり
人さんけいありあり。初年よりありあり
御事りと云々 神領百甲解修と

稲荷の淨慈寺を油小路七条乃南を
 弘法大師東寺淨土を築き乃時より八
 幡鐘を造りてありしをあらわしてほ
 いなり乃神祇所なり大師を祀りて
 其の地を長者と云りて家を有りて
 廿日を経くことの稲荷山は鐘を
 さしめぬ今今よりして淨穢雨を廿
 日乃鐘をあらわすは淨也 東寺縁記
 又壘囊抄の記也 其の地を長者といふ人乃
 御ききのなり今古浄土を祀りて
 壬子五年 ○壬子年 始てのなりをあらわす
 ○丹波の雲よりなる狐をさく
 癸丑六年

○日本乃風土記をつくりし
 ○ついでて木曾のつくりし
 ○差我乃法輪寺建立 智福山と号す
 大井乃西より本よりハ虚室を築く 釋道
 昌乃因基とす 甲寅七年

○布二丈六尺を一端とさくむ

○出羽の國より蚕を養ひのをさく

○紀清人國史を撰む

靈龜

四十四 元正天皇

草履云々 文氏

乙卯

帝乃は始てなり。淨母元明天皇乃
 ゆづりたりまきと。信よつとくしを位年

○九月三日淨即位 ○左系職より七

す乃靈龜をさく左右乃眼白く頭

あり ○言備大臣 下道真備と云 玄物

僧正阿倍仲曆十六といは三人とも

養老丁巳元年 ○三月左大臣乃

薨じ七十八とい ○齋澄法師白山

○九月みのるは泉老を養へしとあり

乃のそとを養老と改えたり

これに志す乃暴布と云へり

戊午二年○天竺の羅刹を遣はして東

塔院をこころうと○十二月遣唐使の

○孝徳天皇を遣はして伊弉諾の宮に

○官人又笏をのこす○婦人乃衣

服乃間と云ふ

庚申四年○五月舍人親王安麻呂等日

本紀三十卷をえり

○八月廿三日大臣不比等薨じ六十二

太政大臣正一位を贈り文忠公と諡し

淡海公と封じらる○九月壬子八十八

天皇崩御六十一

○大和の長谷の

○九月十一日

○十一月元明太

天皇崩御六十一

壬戌六年○蘇我魚名を

○始て女醫

を

癸亥七年

神龜 聖武天皇 二月四日

甲子 正月帝はゆりて太子はゆりて太

上天はゆりて

○八月聖武帝はゆり

は通姫詔し

○三月十八日

乙丑二年

丙寅三年

○天皇は

○行基

丁卯四年

○三月大和

○行基

○行基

○行基

○行基

○行基

○行基

○行基

○五月廿日つら風南苑のうへまを二か吹
おふ 戊辰五年○九月ふむひがし
二丈むくり穿つあはれく文中之を三あつ
巳己[天平元年]○八月淡海公のむまら光明
子を皇太子立○春は天王貴平知百
執乃七字と登る龜をさす

庚午二年

○子安塔の清水寺樓門のあま
傳言 聖武天皇の后少御女皇太后
よ傳言のまを伊勢の大社宮よりい
のりまらふ小一巻のまよ一す七か
記言乃靈像のまらうがまはれあ
あまらうまをふまはらうらふ
ゆまらに養老二年六月果して
女は延生あり 孝徳帝の世かま
て淨律傳らて天平二年山城乃國
車轉乃里は二重乃塔をさす一す七分
の靈像を安む春産寺と号す世は

子安乃塔と稱ど婦人ありこれ
を崇とあられをけ塔の建立ち清
らも孝徳七十六年いあかりと

○まら真福寺乃塔草創

辛未三年○紀のふの海は五日のるあは

しと血乃ご 壬申四年

○夏大いどり五くこのらど○八月之風

○遣唐使の 癸酉五年

○淡路廢帝生まふ○二條の神出現

○七月孟蘭盆會の供物を備へて例とす

甲戌六年○正月光明皇后をうらぐまの西

金堂を造る○四月ぢんふら

乙亥七年○三月遣唐使のらし乃玄宗皇

帝よまらるて歸朝○吉備大臣を

助傍を同時よ歸朝○三月吉備大臣

のちのちらはらひらまひら

牛頭天とよあふ○新田のたふ覺む

○十一月一品舍人親王薨むら一六十

太政大臣を任じし

丙子八年○南天竺の佛塔を造る。これを

を菩提伽藍と云ふ。葛城宮に持たせ

とたまひりしを諸兄とあはれむ。持た

の御あり。○華嚴宗の祖道璿律師

唐より來りし。丁丑九年

○桓武帝崩す。天下に疫癘を起す。

○四月菘原房前五十一七月菘原磨四十三

同月菘原智磨五十一八月菘原宇合四十四

以上四人同年に疫癘を起し、薨じ、二人

の兄弟も亦不比等の息なり。

戊寅十年○松浦明神ありしを

○勅して毎月六日の日、漁獵をいさむ。

己卯十一年 庚辰十二年 ○茲を山内國

相模の郡よりほを恭仁宮とまづ

辛巳十三 ○遷都の賀よりして天下に大赦

あり。壬午十四年 ○奥州より

○六月菘原ありしを

○十二月より菘原をらにりとて

南都の東大寺とせん。せらるべきの

よと伊勢太神ありしを

癸未十五年 ○正月始に版赤の魚を

これより毎年正月の節命にけしを用

○十月天皇ありしを

幸行基をして天下よとめて金

丈六の盧舍那佛の像とせしむ。其の

多のをも安置して天皇にまづその

繩をひきこみ。乙酉十七年

○正月行基を大傍とよほせ

○八月盧舍那佛の像を東大寺にうつ

丙戌十八年 ○玄昉佛を不義の

よいてつくりしを菘原磨とよめ

の怨霊いづらとせり。玄昉をつとめて

て禳と東大寺のをせしむ。

○田地并園木の地を買て寺とせしむ。

を禁制しあふ○天竺婆羅門を

丁亥十九○九月廿八日壬午の堂成統

乃寺師ハ婆羅門僧也

○中将ひりまら 戊子二十

○四月元正太上帝崩降六十九の依保
山ヲ葬す。七月神運薦乃より千部の

法華經を講じし

天平勝寶

四十六 孝謙天皇 先帝聖
母の所

己丑元年

むとろを位十年

○みらのくより遊て黄金をなする國

小田の郡より知りあり

○四月聖武帝東大寺小を造りて

はまづり三寶乃奴と稱す

○福籍兄を正一位に叙し藤原豐成

を右大臣とす○七月孝徳帝はそを

聖武帝を太上天皇とす

○は元宣より八幡を東大寺のうらふ

くまのりて奈良八幡とあむ

庚寅二年○八幡宮を八百戸を封じ

○三月吉佐大臣大伴古曆遣唐使より

辛卯三年○勝寶より以前の僧より拜僧

をなす

壬辰四年 千七百戸 ○二月

○四月九日東大寺の大佛むかひん

上皇御幸

癸巳五年○先代をたす

甲午六年○遣唐使

○江別石山寺を本寺に如く稱する

○唐乃鑑真東大寺に戒壇をたす

○八月風あつてをそとる

乙未七年○八幡宮にて常神田を請

丙申八年○五月二日聖武太上帝崩降五

十六の依保山のふもとに葬す

○上皇の遺詔よりて天武の孫新

田皇子の子道祖をすく太子とす

丁酉(天平寶字)禁中乃寢殿の二重塵丸

又天下太平の四字をのづくるまじき又
まろがのらやうり皇帝命百年といふ
字をまじき香をさくぐりて(鏡)号

と天平寶字とあつしむ井手大臣

○橘諸兄薨む七十四井手大臣

○三月太子道祖王をまじくさくさく大物主
むくまふ○二月大子まじく大物主

をまじくさく是も天衣の法
○五月仲磨又崇徳内相と云官をまじ

づまらるるのて権威つより右大臣を
仲磨のとも中まらるる仲磨のとも

崇徳内相と云の仲磨が威勢まじく
るをまじく仲磨をまじく道祖王と云
まじくとまらるるけりまらるる道祖王并
またまらるる磨まらるるまらるるを
つくりは流罪

戊戌二年○大和まらるる有根と云て字をま

○八月天皇を位を大物主まらるる

巳亥 四年 淡路廢帝 天皇をり乃

子史在位六年仲磨を有勢御孫と
まらるる執政也

○唐の鑑真和尚招提まらるるをまらるる

○六月舍人親王を退まらるる崇道盡
敬皇帝とあむむまらるる山乃南君乃
森乃ちんまらるる也

庚子四年○正月天皇乃御孫より從一位大政
大臣をまらるる(良弁後)は任まらるる

○三月萬年通寶大平元寶乃後をまらるる

○六月光明皇太后崩む六十辛丑
○十月まらるるをまらるる乃御孫よりまらるる

壬寅六年○弓削道鏡と云後孝德帝の
そまらるるけりまらるるまらるるまらるる
天皇まらるるまらるるまらるるまらるる
丁卯二帝乃中不也

癸卯七年○五月五日唐の鑑真和尚寂と

○六月廿二日大元正のまんだらごまごま

甲辰八年○九月神勝ひけん官軍といひ別

たりまゆくろせんを柳橋ひげごんて

首をまきくろく天竺をあららるゝふた

くー西の鑑鏡くまう

○十月若後まうあてびは位まつまふ

弓削道鏡は師は太長孫師の号とあ

天平神護

四八 稱徳天皇 女帝 重祿

己元年

若通天皇とあてひは位とあらあふまう也

○癸帝あららるゝのまはは崩御廿三の

○十月弓削る後又太政大臣孫師を

まげく○十一月後佩右大臣ま威覺と

○かゝの冠大寺ま

丙午二年○十月道後ま法皇の位とまづひ

若系承子と大長と一在位と大長と

丁未 神護景雲元年 ○最澄ま 僧志天

○七月釋勝道とらめて下野の國二

荒山をひらく空海ま山のは日光山

と結と 戊申二年○七月のろろ

又孔子を遷して文宣王と謚と

○十月九日壬日乃神社を大和の三

宮まよるはま 巳酉二年

○九月天竺はくろくを道鏡まゆぐん

しありひまへもあふまをまおそれ

まけの屋敷をちくしとてはく

しのう依まふまざらう清磨海澄

あて祐愈まあまらるゝと奏す

ま道鏡はくめて清磨があゝのまら

まらま大隅ままら

寶龜

四十九 光仁天皇 六十二のうて

庚戌

十二年天智帝の孫施基まらるゝ

○二月稱徳帝は西の由義のまらるゝ

一あふまはあてま合和まらるゝ

四月帝遷幸六月帝不御八月四日
あふらとく帝崩御壽五十三

○十月光仁は即位寶龜と改元

○道鏡をさしつけの玉よかぎて高野
寺乃別當とて先帝の御母少くも
をりて死罪をゆるむ

○和氣の清磨とやうへと

○死列てふ寺とていふ

○天皇の父施基の御名をさかへん御天
をいと益せしむ

辛亥二年 ○二月尤大臣永子薨む五十余

○法皇の御孫乃法房前の子也

○法皇の御孫をさすしむ

○皇孫あふらとくあり雷のひびく

壬子三年 ○三月十稜院をさく

○道鏡死す無人のれをりて葬す

癸丑四年 ○十一月六日良弁傍に寂と

甲寅五年 ○四月天下に急まれしむ

○空海まゝ 弘法大師 ○三の唯山并權

をさすしむ世流布乃本よ世に記す

或記よそ稱徳天皇神護年中草

創とてあゆむかゆは神護國祚真

言寺とまづけて三の唯山と号す

寺摩三百五十餘る ○平城 平城

乙卯六年 ○四月十四日中務ひめ薨む

太長長を成乃むとありと一十九

○十月春使大臣薨むと一八十二

七年 ○九月廿日 中務 中務をさす

○遣唐使立 ○冬大ひかり宇治

川乃あつさしむ ○十二月華嚴宗の祖

對訓寂と 戊午九年 ○十月遣唐使

乃ふの破る海とていふ

己未十年 ○あべの仲磨唐より病死

○三島の作のあふらとく伊豆とていふ

庚申十一 ○系初の法皇の雷火と

○同年清水寺の
 坂上四村丸伽藍を築一八尺の千
 手観音を安置と大同年中清堂成
 延鎮の開基寺僧今真言宗也其れ
 南都法相宗一多院の門をもち其れ
 執行を寶幢院と云目代を慈心院と
 云如の轟擡乃ありありのつぐゆは轟
 坊と云けあり六坊を又本観を成
 就院と云寺産百三十を各これを分
 領と云本堂乃あり興院千手堂を
 并田村堂あり田村磨服は行磨延
 鎮の傍斯よる三層の寶塔ハ
 差巖天の女の降春子は懐妊のとき
 數を乃の産乃あり田村磨乃と云
 ともあり春子はとらり田村磨の女也
 又朝倉堂ありありん乃國朝倉氏
 貞影るるる清水寺をあげり其れを
 別よけ堂を建て觀音を安置を

辛酉 **天應** 元年 ○四月三日天皇位を相

喪帝は清ゆつり ○十二月廿三日定化帝

崩御 壽七十三の慶乃降は葬

○釋 藤井慶後を空山といくく興

院を太郎坊にて軒遇突智の社を

まつりもの也は社史雜と云く其あり

火のれは社あり又別よ堂をいんく

地藏檀越を安置し勝軍地藏と

云く其密宗と云く其後社と

ゆと寺中は五坊ありを四坊の天台

宗の所謂勝地院教學院大善院

威徳院これ他真言宗一院あり福壽

院と云其一代乃僧別よ寶藏院と云て

退院のありと云これありて六坊と

を鉄華社の表に是空山裏は白雲

寺の額ありありと云く曼殊院は其

王良尚の筆也寺産六百石と云

○同年藤井慶後を空山に隱す月輪寺

とつり鐘倉山と号を慶後五天山を
うほして五岳寺を建てる事あり
鐘倉山を才一岳とて本寺の千手観音
大佛門前の西宮なる系海白雲寺
け山は寓居しま宮座上人も又
とつり鐘倉山と号を慶後五天山を

皇曆 第辛 桓武天皇 乃のまの早

六さのつとくゆそくむを位二十五年
○五月四日宇佐八幡乃の神宮より
八幡大自在王菩薩と号し

癸亥二年 ○正月十六日江別乃郡ひえの
山のつとくゆそくむを位二十五年
十役所とあむむ

甲子三年 ○正月ひえの山のつとくゆそくむ
乃のまの早
○五月七日壁二三万ふはははより天王
寺ふあつまり合衆

○六月山列し乃の神宮より
と云 ○七月ひえの山のつとくゆそくむ

乙丑四年 ○南都の定額寺を
丙寅五年 ○正月七日上野田原
○あつと乃梵釋寺を
○葛原系親をたがれ天を

丁卯六年 ○興業寮より新修本草
戊辰七年 ○七月大中
○釋最澄比叡山延曆寺を建立
或記ニ云ク斯山始り日枝山と号を延曆

年中傳教大師桓武帝乃勅を奉て
るを創創して延曆寺と名づく山を改
て比叡山と号をあるひ中華よけして
天台山といひ又四明洞と云け山を改
乃らめく屬と名づくも西坂のひ
の必宅宮那は屬と名づけ山帝勢
強と名づく又春三月乃の
名を改め

ついで平安城四角乃山をめぐり池は
向ふは山いより外は又けさぬ三塔
を所謂東塔止觀院西塔寶幢院
檜川楞嚴院とせ東塔乃南は無動
寺あり慈覺和尚乃位多ひ一ありて
乃下の舟を強ひて西也大菩薩の同
尚存も西塔は黒谷あり是始浄土
念宗の元祖因光也古師乃位一
あり一兩也中堂乃なるも業師たり
け山つありへ三千坊あり近世織田信
長公よりせん乃國新倉氏と我々の自
信長公よりせん乃朝倉氏よりせん
るをのりまひくく坊舎を建て
一殿七滅まつる今代寺門を再興
せられて坊舎今百二十五坊あり寺
者五千石あり

○同年空海大師をよ入
己巳八年 ○法圓乃南阿をせり

庚午九年 ○夏券は六ひでり月をへり
○新を修りけんとなく ○もがさあ
辛未十年 ○四月中乃申の月始と日長
七社乃のりとせり
壬申十一 ○漢音をくもりつひ
癸酉十二 ○山を乃國首野新乃内裏と
つくりまふ

甲戌十三 ○十月昔乃内裏とせり
同廿二日天を内裏よりつりまひ平安
城とせりまきらう百五石ありつり
大なる人形とせりつくり甲曹とせり
り兵をありせり後のお徳様とせり
とらひて東山乃上りてありまひ
つづむとの將軍塚とせり世傳せり
まがく天下は教ありまきらこの塚とせり
まとのいはれぬ お家塚乃丸山の頂
あり 案じらるる今に傳ふまきら
あり 此山頂はあり花園寺の

又上栗田の門より勝軍山にこそは
勝軍地蔵堂と云ふゆへは勝軍也
まづらう者世世人あやまりては勝軍
とを勝軍塚といひ

同年洛陽慶岩山念佛寺草創

けさの千觀内供奉の因基にしてなる
観音くふの像を造ると外門二王の
像ハ佛工運慶應寺の作らぬ車
石町二条のゆゑも今よりあてを
二王門の町と云えつづれぬるれ二王門
とのありとゆゑを考へて中世を
けさの寄附して門を造つてこれを安
むと坊を念仏と云ふ毎年四月二日
の香門の大神人方丈よりあつち
宮を造つてとこれと天狗酒宴と云
ゆへ本堂牛王加持の場よりむき
を敷とさしし法界と云ふは宣
しりかたゆへは天狗酒宴と云ふ

同年ひえ乃山をんまの供養

乙亥十四 丙子十五 〇之東寺を信裏の

羅生門のあまこんまらうと
羅生門之平安城の南門に東寺の
千本通の南九条通の南面回廊
その外をいひと今地中六尺なり
下ふる今あるの中観音堂は八臂
の毘沙門天の像を寺信をねを羅
生門のなると云ひあへりやうん
の下まあんだまらふの像也

同年〇くくは寺とハ 獅子野山觀音寺と

号と大中大丈若菜侍舟人の筆録
大夫あくはは師依り揚地をわて観
音を安置せんとわると 悲智なる若
よりて毘沙門の像を造り大丈あつ
けゆるの像ハ我の親あつと一衣
又着乃若より観音毘沙門 異
同祥なるを造りて寺をくくはと

びちやめん天を敷垂し又別日觀音の
像をあんらをも今本堂のあまの観
音堂られ也寺傍天台宗にて青蓮
院門を寺務あり云

丁丑十六〇十一月さうれ上乃田村磨征夷大
お家よはせど〇管る真道新續日本化
四十卷を撰む

戊寅十七 巳卯十八〇二月和氣清磨平乃と
庚辰十九〇續くく爵をりむるを時を
辛巳二十〇まるとくのはらるるに舟橋を後

〇奥乃夷賦んをわてとらぐ乃
まらとせせとよせめとら上田村磨
これをつたへて〇十月田村磨又後三
位をさづきし

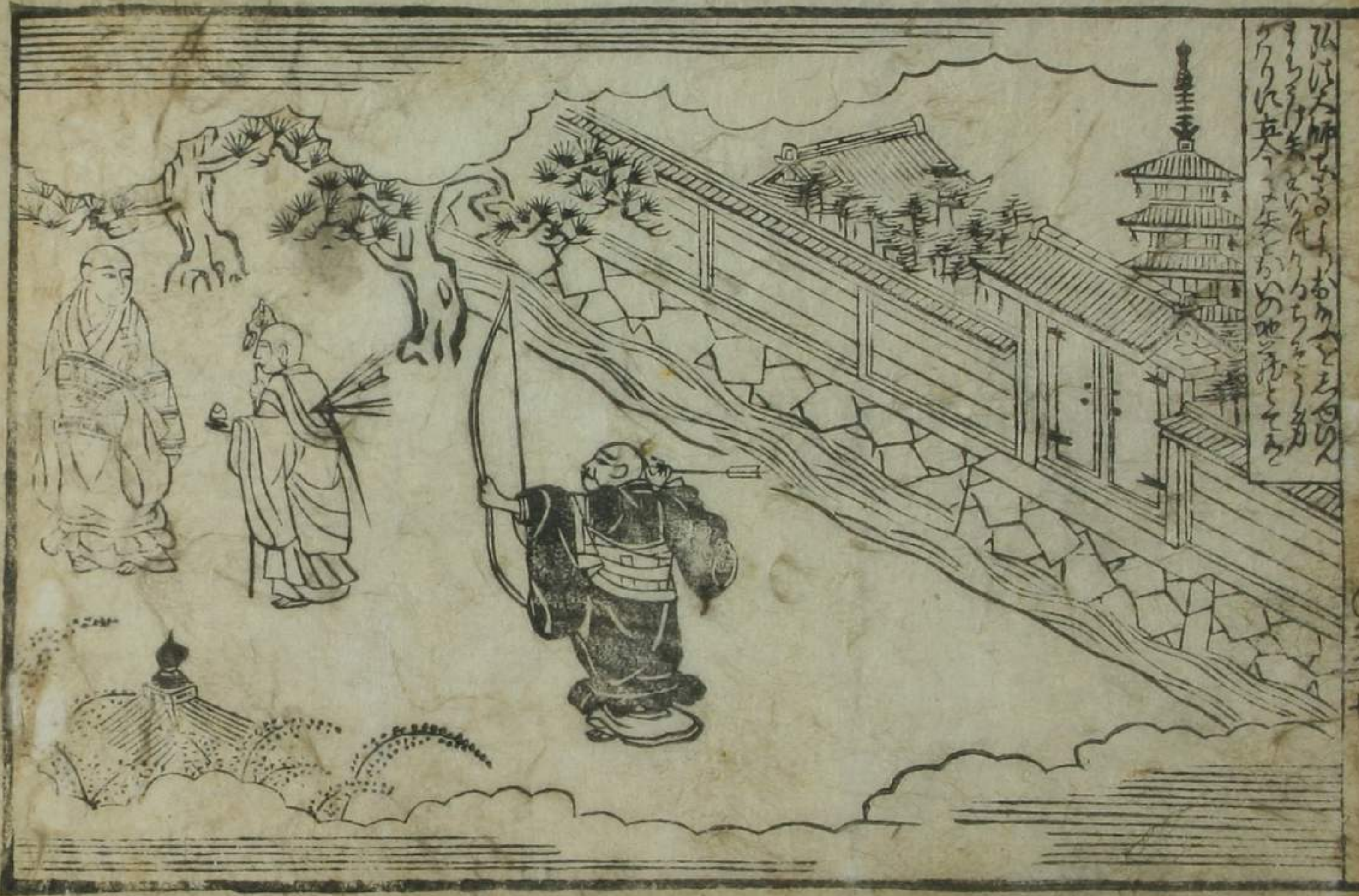
壬午廿一 癸未廿二〇始ていせの春宮寮と並
五月空海に遣唐使と同航しとく八座
七月最澄傳教入る

し酉廿四〇六月最澄遣唐使とつれて陽綱



延暦年中に於て大師の
天宮らしきけいひの山なり

弘仁天皇御宇、平城宮に遷都す。御宇に於て、平城宮に遷都す。御宇に於て、平城宮に遷都す。



○九月、勅して最澄を推して灌頂す。

大同

丙戌

〔五十〕平城天皇

五月、御そくを相承す。

白も、也。在位四年、和帝なり。帝と号す。

○若菜、肉磨と云、大臣、上田村磨、云々。

○三月十七日、桓武帝崩御。七十六。同月、山

を乃乃乃の拍系乃、陰より、云々。

○八月、空海歸朝。

丁亥二年、冬、めくす、云々。

戊子三年、己丑四年、四月、天皇を以、御そく

い、云々。を、御そく、云々。御そく、云々。

王、御そく、御そく、御そく、御そく、御そく。

○八月、天皇を太上天皇と号す。御そく、御そく。

○十一月、天皇を太上天皇と号す。御そく、御そく。

平城宮と云。

弘仁

庚寅

〔五十二〕嵯峨天皇

御そくを御そくす。

王と申を在位十四年

○九月前系仲成がのり尚侍を奉子と云
女太上天皇のてうあひをえそくやうくは
みまらうが太上天皇へ教ををまへらう
されやていひは位よりさまへらうとて
めすを太上帝法皇のまへにまへた箇今
杯ころきまひ法皇のせきとてめしむ
太上帝奉子とてさふ東宮にむかひま
田村ぬえをさびり仲成をころすと太上
帝のさうかてをさのまへにかりて
をそり傍とちりあふ奉子ハ毒をころそく
死とて○姫くはををさの毒院とても
毎院のそめ也

辛卯二年○五月廿二日坂上田村麿豊を年

五十四宮路の郡栗栖村まわらむる勅を
よりて御辨弓矢を指のうらへれ王城
の方へひびきまゆそく土葬よと

壬辰三年 癸巳四年○まらう長福寺の南邊

堂をらんまらうと導師ハ空海

甲午五年○八まん大をのひらうらたけ

岩を最院よたまらう

乙未六年○圓珍信教後列にけらう

西甲○六月空海紀別高野山をひらく

丁酉八年○天下大ひでり

○山階寺は奉會好

戊戌九年○ひらの宮の工よりて大内裏のう

北門の額ハ宿業東面ハ橋邊海南面并ニ

後天門ハ空海ハ御堂也 巳亥十年

○寂院戒壇を麻山は築くんとて

庚子十一○空海ハ傳燈大法師の位をのみ

辛丑十二○寂院よ多のらんハ戒壇とてらむ

壬子十三○六月四日寂院寂と年五十六

癸卯十四○二月東寺を空海よたまらう西寺を

守敏よたまらう 或記ニ云ク東寺乃 年を

金光明四天王教王護國寺と云ハ号を

秘密傳法弥勒山と云院を蓋賢持持院

と云ふの如くへけ不東海の大... 東寺と号し。西を西寺と云。南郊の東大寺西大寺と云がごとく。弘仁十四年

正月... 頂院を建... 中... 金剛頂... 授王... 西寺ハ東寺乃... 一... 又東寺西南ノ角...

堂... 守敏... 弘法大師を... 今ハ... 田疇... 金堂... 塚一... 又東寺西南ノ角...

今... 知... 同年... 四月... 伴... 九月... 離宮... 天長... 淳和天皇... 講ハ大伴親王... 西院...

甲辰 天長 淳和天皇 講ハ大伴親王 西院

三月... 守敏... 勅... 朝... 也...

三日乃る大なる地震あり也天下のこころお
なく皆震ふなり

○七月五日平城天上天皇崩御五十二歳
同日ヤマトノミヤノ藤原ノミヤノミヤノ

○十月最澄の弟子義真あんなりてその
座をとりて天をなまらむなり也

○源融（乙巳二年）

○高祖の神護寺をあらしめて林獲
國祚寺と名づく○浦嶋子わらわらひん
よ入てより三百余年をたててこゝに

くゝふ 丙午三年○七月廿七日
嗣薨御五十二歳 兩院左大臣と名づく

○十二月東寺の修り 丁未四年

○文壇（戊申） ○その年のこと
○法皇と七皇子と名づけらる 巳酉 天下を治む
○又月々その安世法皇より車とつら
唐 七月十一日安世法皇崩御 辛亥八
七年 滋野貞重よりいさむけりて古今

文とあつむ和府畧と云千卷あり

壬子九年 ○むすむ野毛（延暦）

○あめ皇太宰少貳と名づく

○清原原野らるるにのりて令義解を

えらふ ○二月天皇を位を正良親王と名づく

て淳和院と名づく ○十一月をめぐりて

檢非違使と名づく 看督長六十六人を付

甲寅 承和 五十四 仁明天皇 謙ハ正良親王

草帝と名づく 崇我帝の二の御子と

いふハ福嘉智子と名づく 去六年

三月ははそくを位十七年

○五月始く白馬御命をのこまらる

○あまの宮 小野皇を遣唐使と名づく

○八月之子 親王といへる 去六年

乙卯二年 ○三月廿一日空海高野山に入定
丙辰三年 ○實徳天皇の母と名づく

○三月遣唐使船に因仁も同船して入唐し、八月圓仁六日大坂の舟に

○九月清和天皇御成婚 戊午五年○十二月

遣唐使の船に病と稱して病あり

くつを副使とせしめられしを遣唐使

とせしめられしを遣唐使とせしめられしを遣唐使

後まかりつるを遣唐使とせしめられしを遣唐使

○五月廿日 己未六年

○八月廿二日 己未六年

庚申七年○三月十七日淳和太上天を崩御五十二

辛酉八年○正月七日 業平元服

壬戌九年○七月 嵯峨太上帝崩御五十七

○阿保親王薨也 癸亥十年

甲子十一年 乙丑十二年 菅原是善文章博士

○菅原相乃等之 菅原相乃等之

○釋満米 矢田寺をらん

矢田寺系格三系乃のよみとめ和別

矢田のよみ満米上人(田基)にて中宮の

地蔵の像を造らば満米と改む

西寅十三 丁卯十四 ○十月 仁徳天皇

○惟孝親王 壬辰

戊辰嘉祥元年○六月 皇太后白毫をさす

○播磨乃中堂をり ○長平永寶の鏡を

移す 己巳二年○十二月 天智天皇

たすひて米鏡をまづきさのふしをり

庚午三年○そののの右惟仁親王をさす

こ山を清和帝と云 ○三月廿日 仁明天皇

崩御 甲子のころを山乃後よみとす

宗貞親王 宗貞親王乃のよみとす

遍昭とわくす ○五月 桓武天皇

○檀林寺をらん 檀林寺をらん

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

文德天皇

仁壽

五十五

乃むりひ持せしむ 持しひまをま

癸酉三年の八月南院修入を 修入は

甲戌春の元年の九月新修うまる

乙亥二年の八月五日大らんをうろ大仏の

みく一増まかつるの九月新修して而も其乃

例まきろを天下を御教して大仏の修を

あゆむすむむの天下大してりるをらん

せんあんにいのみ

丙子三年の三月地ちん十月は水くらを

る新修の十月又のふふち白三席

をまら新修の死よまつるの十二月ひち

の修修修の修あまをうらま

丁丑天安三年の四月もくく修花大を

あつとく二を木の世をまはるひまを

の十一月を修の大修ををうらま

戊寅二年の六月をくくあつる長より伸修

の八月廿七日文徳帝崩降世の修修

の修修修の修修修の修修修

の修修修の修修修の修修修

